

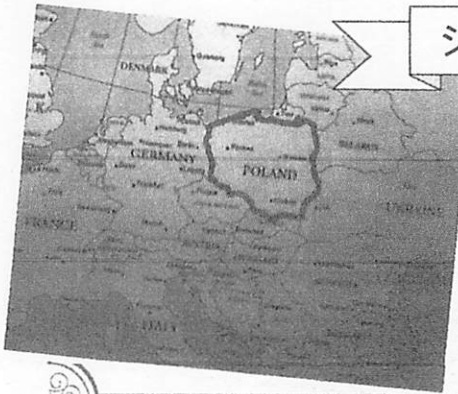


ポーランドの大学で 日本語を教えてみたら

シニア AJALT 教師の海外体験記

ポーランド/ヴロツワフ経済大学赴任中 **小山良夫**

AJALT 入会以前から海外での経験が豊富な小山さん。現在はポーランドの大学で新たな課題に奮闘中です。折しもロシアによるウクライナ侵攻と時を同じくし、日本語教師の目から見た現地の様子も報告します。



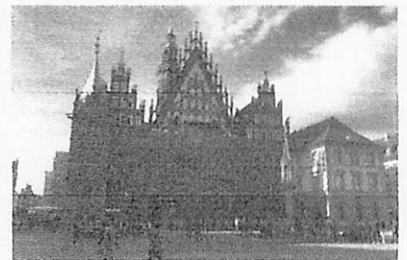
はじめに

私がポーランドの日本語教育プログラムに応募することを考えたのは、2019年に国際交流基金プログラムで2年間の米国滞在を終えて帰国した年の冬の頃でした。米国では「日本語教育」と「日本文化紹介」を組み合わせた若者対象のクラスを実施しました。その結果、もっと本格的に海外で日本語教育に携わりたいという気持ちが高まり、帰国後それを実現できる機会を探したのですが、既に年齢が70歳を超えていたため、JICAや国際交流基金等の公的プログラムに応募する可能性はありませんでした。しかし民間の日本語教師派遣組織ICEA（アイセア）は、派遣年齢制限がなかったので、試しにその門を叩いてみることにしました。

その結果、2020年秋からポーランドの大学にボランティア日本語の教師として赴任する話がトントン拍子に進み、赴任の準備に取り掛かろうとしていた矢先、新型コロナウイルスの流行が世界を覆い始めました。このため、ポーランドへの派遣は1年先送りとなり、派遣の実現も不確実になってしまいました。

しかし新型コロナウイルスの蔓延の影響は、マイナスばかりではありませんでした。2020年の夏頃には、地域の日本語教室で、Zoomを使ったオンライン授業のや

り方が紹介され、急に活動の世界が広がったのです。そして、ポーランドの大学生を対象にZoomを使ってリモ



ヴロツワフ旧市街市庁舎

ート授業をする話が浮上し、2021年の4月から6月の3カ月間、日本からリモート授業を実施することになりました。問題は現地と7～8時間の時差があることで、日常生活リズムを調整するのが大変でした。

ジェシユフ工科大学への赴任

2021年9月末、コロナ蔓延が一段落して対面授業が可能になったので、ポーランドへの赴任が実現することになりました。場所はポーランド南東部にあるジ



ジェシユフ工科大学
日本語の授業風景

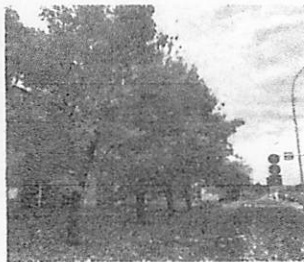
ェシュフ市の工科大学です。初めての日本語コースの立ち上げで、週1回の授業を6クラス、全部で90名近くの生徒を対象にスタートしましたが、このうち1クラスは、4月からオンラインで授業をしてきた学生で編成しました。

着任して授業を始めた10月初旬は、ジェシュフは黄色に色づいた大学周辺の並木が美しく、近くを流れる川岸の散歩道を歩くと白鳥が泳いでいるのに出会えました。宿舎として提供された大学の寮は、改修されたばかりで大変快適でした。

しかし11月も半ばを過ぎて、授業もようやく軌道に乗ってきた頃から昼の時間が急に短く感じられるようになり、気温も急速に下がって12月に入ると最低気温が零度を下回る日々も出てきました。本格的なヨーロッパの冬の到来です。



白鳥が泳ぐ川岸の散歩道



黄金色に色づいた並木道

ポーランドで日本語教育に携わって感じたこと

ここで最近の国際交流基金の調査(2021年)を引用して、ポーランドの日本語教育状況を見てみると、東欧諸国の中ではポーランドはロシアに次いで第2位の約5,000人の学習者がおり、日本語教育機関数や教師数も47機関、234人で第2位となっています。

こちらで実際に日本語教育に携わって感じたことの第一は、日本語の学習動機が純粹に日本語や日本文化への興味から出ているということです。ポーランドの学習者には経済的・社会的な動機が殆どみられないのが特徴です。この背景の一つとして、ポーランドの学習者の多くが幼少時から日本のサブカルチャー(漫画・アニメ・J-pop音楽など)に触れ親しんでいて、この関心を更に深めるために日本語を学習したいという共

通の動機がありそうです。

ポーランドの大学での日本語指導では、特に初心者や初級者対象の場合には媒介語としての英語の使用が不可欠だと感じます。ポーランドでは、大学生はほぼ全員英語で日常のコミュニケーションができます。このため、日本語の授業でも文法的な説明や授業の進行、出欠や提出物の管理等は多く英語で行っています。

教科書は、初級の学習者に対しては受け入れ大学側の希望で『げんきⅠ』『同Ⅱ』(The Japan Times)を使用しています。この教科書は、欧米の英語を共通言語として使用している国の教育機関では、かなり広く使用されている教科書です。

ロシアのウクライナ侵攻と千羽鶴プロジェクト

私がポーランドに赴任して5カ月ほど経った2022年2月24日、突然に始まったロシア軍によるウクライナ侵攻は、私がいたジェシュフに大きな変化をもたらしました。侵攻1週間も経たないうちに、ロシア軍の攻撃から逃れてきたウクライナ人避難民が、鉄道などを使ってポーランド南東部に流入し始めたからです。

2月末には、在ウクライナ日本大使館も、ウクライナ西部の都市リヴィウを経てポーランドのジェシュフに避難し、更に3月中旬にはアメリカ合衆国のバイデン大統領が突然ジェシュフを訪問するなど、当地は俄然脚光を浴びることになりました。

私もジェシュフの鉄道駅や、更にウクライナ国境に近いブシェミスルという鉄道駅にも行ってみました。鉄道駅の構内にはいずれも女性と子供を中心に旅行鞆を持った避難民たちが数百人位滞留しており、かなり混雑していたのを思い出します。



ジェシュフ駅構内



小山さん（左）と千羽鶴チーム

避難民の数は時間を経るに従って数十万人から数百万人のスケールへと急増しましたが、これらの人々がまるで水が砂に吸い込まれるように、ポーランドの各地や近隣諸国へと移動して吸収されていく様は、ポーランド

社会の緊急事態への対応力の高さと強靭性を示していると思いました。

私どもポーランドに派遣されている日本語教師仲間は、定期的にオンライン会議で連絡を取り合っていますが、2022年3月に入って何か協力できないかと相談しました。そして私が呼び掛け人となって、「千羽鶴プロジェクト」を実施することが決まり、日本語の学習者にも参加を募ることになりました。

それから1カ月間、4人の日本語教師と数十名のポーランド人学生たちの協力により、折り上げられた千羽の青と黄色のウクライナの国旗の色の折鶴は、4月半ばのイースター休暇にポーランドの中部都市ウッジに持ち寄って千羽鶴に仕上げられました。この完成した千羽鶴は、その後ジェシュフに退避していた臨時在ウクライナ日本大使館の事務所に預けられ、ウクライナのしかるべき組織に寄贈されるのを待っています。

2022年6月中旬に1年の日本語教育業務を終えて、日本語コースを修了した学生15人に修了証を渡すことができた時には、嬉しさがひとしおでした。

6月下旬には妻も来訪しましたので、夏季休暇を利用してポーランド南部をあちこち旅行しました。この頃には2年目の仕事として、同じくポーランドの大学で日本語教師を継続する話がほぼ決まっていたので、1年目で使った資機材を大学の寮に運んで、赴任の9月まで保管してもらうことにし、7月末に帰国しました。

2年目のヴロツワフ経済大学に赴任

その後約2カ月ほどの一時帰国の期間を経て、2022年9月25日にポーランドの南西部のヴロツワフ経済大学に、1年の任期で再赴任しました。ヴロツワフは、第2次大戦前はドイツ領だったのが戦後にポーランドに編入された都市で、街のデザインや建物などにはドイツの影響が強く見られます。



ヴロツワフ経済大学

今年担当している日本語のクラスは、初級クラスが2クラス（各21名ほど）、中級クラスが1クラス（3名）の合計45名の生徒で、各クラス週2回の授業を実施しています。学生数は今年の半分ですが、昨年と比べて授業進捗のスピードは2倍となり、授業の準備は少し大変になりました。

10月17日に最初の授業がスタートし、2カ月後の12月23日にクリスマス休暇に入るまでに、各クラスに20回程度の授業を行いました。学習者は昨年と同じく純粋に日本語や日本文化に関心がある者なので、どのように学習者に飽きずに楽しく参加してもらうかが引き続き重要なテーマです。



ジェシュフ大学 修了証書授与式



ヴロツワフの日本語授業の様子

（担当：内藤、渡邊）